

発行にあたって

このたび、NPO法人22世紀八幡ルネサンス協会は、地域情報誌の発行を企画しました。当法人が理念に掲げる「文化財保全と文化振興」などの目標にそって、八幡の各地、各界で活躍している方々に登場していただき、八幡の自然や環境、文化、歴史、政治、福祉などに対して関心を高め、「住んで良かった八幡」を実現する一助とするためです。

他にも、地域で話題になっていること、22世紀八幡ルネサンス運動の取り組みなど随時にお知らせします。

八幡に 活きる

民生・福祉委員の 活動を引き受けて

西川 西



私が福祉に関わることになったのは、六十歳定年を二年延長しての退職後であった。

週四八時間勤務で残業八十時間以上という激務からやっと解放され、これから何をするか計画を練っていたところに民生委員の依頼が飛び込んだ。地域との関わりが少なかった私は断ったが、民生委員の方が急死され、社会福祉協議会会長Yさんが依頼に何度も足を運ばれ、仕方なく引き受けて十五年委員を務める。同時に地域情報を知るために学校区福祉委員会に入会して二十年と「子ども・障がい者・高齢者」の支援に携わる。

民生児童委員の任期は三年一期で、原則的に七五歳定年になっており、全国で二万人、八幡市全域で一五〇数名が活動している。民生委員は都道府県知事推薦で、厚生労働大臣の委嘱で活動する。福祉事務所等関係行政とのつなぎ役であり、篤志奉仕者としての自主的福祉活動を

行いが、専門的な事柄も研修している。

生活保護受給者は高齢者一人住まいが多く、年間数回訪問して行政からの受給変更通知書を手渡し見守り観察する活動と、地域住民の相談・支援等を行う。生活保護受給者だけに携わり、他の住民との関わりに積極的でない委員もおられる。生活保護の受給をしていない生活困窮者、わずかな年金だけで暮らしておられるお年寄りが多く、手を差し伸べる必要があると思う。

この民生委員の据ええをしているのが校区福祉委員会である。八学区四二五名の福祉委員が地域住民と「支え助け合いの精神」でボランティア活動を行っている。八幡市福祉協議会配下の各福祉委員会は独自で事業立案企画し、委員の中には民生委員と重複して活動されている方も大勢いる。地域福祉の向上をめざし、地域住民が集う福祉事業の開催、幼稚園・小学校児童との交流、登下校の見守り等幅広く活躍している。活動費用は、事業補助金・開催補助金・地区福祉会費還元金・歳末募金で運営されている。

核家族化と少子高齢化が進み、特に高齢者の居場所が少なく、地域で孤立した閉じこもりが進んでいる。主に一人住まいの高齢者の訪問見守りを近くの福祉委員・民生委員で行い、参加しやすいサロン等を企画開

八幡 エコロジー①

八幡市の 環境行政を問う

石野 喜幸



二年保存樹に
制定がある。
淀川工事事務
所は、二〇一
四年八月一日
付で、八幡市
長にクスノキ

二〇一四より国土交通省近畿整備局淀川河川事務所（以下「淀川河川事務所」という）は、八幡市科手から橋本奥ノ町にかけて木津川堤防工事を行っているが、工事地区に八幡市のふるさとの樹（保存樹）のクスノキ（一九九

催し楽しく過ごしていただくよう苦心し、高齢者の閉じこもり無くそうと取り組んでいる。

最近、八幡市内の二ヶ所の地域で「民守隊」が結成設立された。自民党・民生委員・福祉委員や各種福祉団体の有志が設立された組織で、地域で見守りが必要な登録者を募り、隊員が定期的に訪問見守りし、健康状況などを観察して必要な支援活動を行っている。

昨年、アメリカのトランプ大統領の自国第一主義のよう自分第一主義が強く、慈善への関心が希薄で「自分を忘れて他者のために尽くす」ようなことに余り興味を示さない方が多い。どこの福祉委員会でも委員の高齢化が進み、新規入会者が少なく、存続が危ぶまれる現状である。昨年、社会福祉協議会から自治体単位の組織変え再編成の提案がなされている。それに応える委員構成が出来るか最大の課題となっている。

伐採許可申請を提出。八幡市長は、八幡市の「みどりの条例」によるみどりの審議会を開催することなく、条例十五条の項目による届け出を受け伐採の許可をした。その上で、住民に対する説明会の開催を淀川工事事務所に要望した。

八幡市は、みどりの審議会を開催し、みどりの自然、環境の保護と育成に関して市長の諮問に応じ、必要な調査、審議を行い、市長に答申するという過程をふまえることをしなかった。

住民説明会は、二〇一四年から二〇一七年一月まで橋本公民館で六回開催され、最初はクスノキの伐採を計画していたが、住民による保存活動の高まりの中で、伐採から移植へと変更して現在に至っている。

淀川河川事務所が移植にこだわる主たる理由に、クスノキの日常管理面（小枝や葉の落下という地域住民からの苦情、クスノキの小さな根が堤防敷地内に侵入している事などを上げている。ふるさとの樹クスノキの保存を前提に堤防工事を実施していくというケースを検討しないこと、堤防敷地内に根が侵入していることを主張。八幡市は、保存樹たるクスノキの保存を前提にした堤防工事の実施を淀川事務所に提案するべきであった。

二〇一七年一月の第六回説明会では、移植地は八幡市背割堤と説明するのみで、それ以上の十分な説明もなく、保存と移植の意見に二分した状態で散会した。

説明会は、今後開催予定がなく、工事説明会のみで、多くの疑問・問題などを持ち越した状態である。このような状況の中で、淀川河川事務所は、二〇一七年九月一五日に、橋本四区の住民に対して自治会組織を通じ、移植工事を二〇一七年十二月

二〇一八年六月実施の回覧を配布した。

これまで八幡市は、クスノキに関して行政として審議会を開催しないで、また住民の声を聞く姿勢もなく、その他第三者としての専門家の意見を聞く場所を設定しなかった。

◆八幡市みどりの条例成立と 橋本地区クスノキふるさとの樹 制定までの道のり

市は、木津川・宇治川・桂川の三川が合流する地で、一本となった淀川となつて大阪港へと流れている。水運にいしえから恵まれ、みどり豊かな田園と男山の丘陵、山並に連なり、石清水八幡宮の門前町として、歴史と文化の街として来てきた。しかし、五〇〜六〇年前頃から戦後の経済復興、都市化の波が八幡にも訪れ、道路建設、河の改修、宅地造成工場進出などで街のあちこちがコンクリート化して、のどかな風景は様替わりした。

樹木の伐採、動植物、鳥類、昆虫、魚類がまたたく間に減少していった。

八幡市は、一九八三年頃、失われたみどりを取り戻し、安らぎのある都市を作るために、ふるさと森づくりに着手した。

①うるおいをもたらすみどりのある森
②個性豊かなみどりのある森
③いこいとふれあいの場としてのみどりの森
④古く歴史のふるさとの森
以上四つの柱のふるさとの森づくりの全体構想の実現に向けてスタートを切った。

それから約十年後、一九九一年三月、八幡市みどりの条例公布（四月実施）となった。一九九二年二月「ふるさとの樹」を指定。橋本のクスノキは一九九二年三月、八幡市ふるさとの樹（保存樹）第一号に制定され現在に至っている。



八幡の野鳥

1

野鳥― バードウォッチング への誘い

金田 敦男
(八幡自然塾 顧問)

大空を遊^{あそ}ぶ鳥、小鳥達の軽快な動き、美しく複雑な模様をもつ羽毛、各々固有の鳴き声、魅力あふれる生きものです。このような鳥達を野外で観察し楽しむのがバードウォッチングです。

早朝の散歩路、駅までの通勤路上、登校の通学路、小公園等々、季節を問わず鳥の姿が見られます。その時、鳥を見ようとする意識をもってください。そして鳥の声を聴こうとする意識をもってください。意識がないと見えないうし、聴こえません。

自由に空間を飛び回る翼を持つ鳥も、全ての他の生物と同様に、その生物固有の生態に合った環境でしか生存できません。鳥達も自分に適した環境を掴んでそこに棲みます。鳥に限らず生き物のその場所の選択要素は食べ物です。その鳥が何を食^たべるかで生活の場を決めます。

鳥が摂る餌は多種多様。小はプランクトンから、大は哺乳類、鳥類、魚を含む水棲動物、両棲類、爬虫類、植物で種子、木の果実、水草、藻、あらゆる昆虫、その他の虫、等々非常に多くのものを各種の鳥が選んで摂っています。

多くの種類の鳥を見るためには、それらの鳥が棲んでいる場所に行かなければなりません。それでは

私達の身近な八幡市の探鳥地をみてみましょう。

八幡市は、二四・三三平方キロメートルと決して大きくない市域ですが、各々異なった特徴をもつ3つのエリアがあります。

(1) 三川合流地

日本国内で一級河川三川が内陸部で合流しているのはここだけと言われている。三川の流域面積は広大で、芦原・草原・河畔林があり、特に桂川と宇治川に挟まれた区域は豊かな河畔林が繁茂している。河畔林には森林性の鳥が、水辺・水面では、カモ類・サギ類、草地では草原性の鳥、時には上空をタカ類が翔ぶ。

(2) 石清水八幡宮を 中心とした男山一帯

男山は京都府歴史的自然環境保護地域の第一号に指定された貴重な森をもつ。

一帯は孟宗竹林が広がりを見せてはいるが、石清水八幡宮境内地は極相林(安定した森)になっている。森林性の鳥が多く、夏鳥が見られる。

(3) 内里、戸津、美濃山を 中心とした地域

西側に大谷川、東側と北側に防賀川が流れる。二川とも小さな川だが、鳥が集まる処である。周囲は広大な圃場(田畑)が広がり、農業用水の水路や草地がある。周囲には雑木林も多く、水辺の鳥、草原の鳥、林の鳥が見られる。

季節による鳥の分類

○留鳥(りゅうちょう)……
同じ地域に一年中生息し、季節移動はしない鳥。



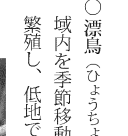
セグロセキレイ
(留鳥)



シジュウカラ
(留鳥)



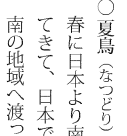
メジロ
(留鳥)



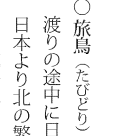
八幡市の鳥



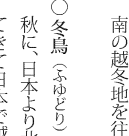
モズ
(漂鳥)



○夏鳥(なつどり)……
春に日本より南の地域から渡ってきて、日本で繁殖し、秋には南の地域へ渡って越冬する鳥。



○旅鳥(たびどり)……
渡りの途中に日本へ立ち寄る鳥。日本より北の繁殖地と日本より南の越冬地を往復する鳥。



○冬鳥(ふゆどり)……
秋に、日本より北の地域から渡ってきて日本で越冬し、春には北の地域に帰って繁殖する鳥。



マガモ
(冬鳥)

※みなさんのご希望があれば、八幡市内の探鳥地を案内します。

政治の話

しましう

第1回

戦前の日本はなんと
不自由な社会
だったのか

日本国憲法 vs
大日本帝国憲法

石野 はるみ

七月二日八幡ぶどうの木教会において第六回「憲法カフェ」が開催された。「戦前の日本は何だったか」をテーマにして、原田敬一・佛教大学教授(近・現代史)を講師としての学習会であった。三〇名弱の参加者は、一八八九年制定の大日本帝国憲法(以降、明治憲法)が日本国憲法とどう異なっていたかを学んだ。その後、参加者が意見を話し合って話し合った。明治憲法について考え、現憲法の理念のすばらしさを改めて気づくことができた。

明治憲法下の日本は、近代立憲主義国家であるが「外見の立憲主義」とみなされる。天皇が日本帝国の最高権力者として君臨する国であったからだ。国民は主権者でなく、基本的人権の思想がなく、また権力の三権分立もない制度であった。究極のところは、行政権立法権司法権のすべてを天皇が持った。帝国議会の役割は天皇に對しての「協賛」であり、行政権は国務大臣が天皇をお助けする、「補佐」することにある。

司法権は「天皇ノ名ニ於テ」裁判所が行う。議会は実際の財政上の法律、その他の法律を「政府ノ同意ナクシテ」は制定できない。国務大臣のなかり政府の長内閣総理大臣を決めるのは、議会ではなく天皇である。この制度のもとで、少数の実力者たちが、天皇を「輔弼」する内閣総理大臣を決め、それを天皇の意思とすることとなった。他の政治的議論なども同様で、議会や政党から出される異議を天皇の名によっておさえた。憲法改正は天皇大権とされた。また緊急勅令によって国民を戦争へ駆り立てた。

明治憲法は基本的人権が軽視された憲法である。軍隊を維持し、国民の義務としての兵役が課せられた。差別的で閉鎖的な教育体系をもち、学校制度は法律でなく、小学校令などとして勅令主義であった。植民地、台湾では総督府が高等教育機関を担った。専門職の技官は重んじられず、帝国大学卒の法学部出身者の官僚支配が圧倒的であった。修身教育を推進するために、天皇のお言葉として教育勅語が出された(一八九〇年)。正式な徴兵でなく陸軍省令によって少年兵が動員された(沖繩一九四四年)。明治憲法下でも違憲である。

明治憲法下において、国は強力な治安維持体制を持つ監視国家になっていた。一九一九年、社会正義と労働者の権利を提唱するベルサイユ平和条約を締結したが、労働基本権が認められていたとは言えなかった。労働争議は治安警察法(一九〇〇年)で取り締まり、一九二五年に治安維持法ができ、さらに一九二八年には治安維持法が改正され、緊急勅令、死刑、無

期が追加され、特高(特別高等警察)ができる。明治憲法の下では不平等社会として男尊女卑、社員と工員、外地と内地、戸主権をもつ戸主と家族という序列が明らかである。しかし自由民権運動は、理想をもった学習運動として広がっていた事実(一八七四年〜一八八四年)は注目すべきである。

明治憲法について顧みると、復古調の自民党改憲案は、私たちが敗戦を期して持った現憲法の平和主義、基本的人権、民主主義の精神を「スルー」(看過)しているのが、よくわかる。自民党改憲草案(二〇一二年の問答に、現憲法にある基本的人権の規定は、西欧の天賦人權説(人間の生まれながらに持つ尊厳としての権利)によるもので、改める必要ありと記されている。自民党改憲草案には、明治憲法と同様に人権思想がなく、国際的な認識となっている人権擁護に欠けている。自民党は自衛隊を「普通の国」の軍隊にしていくことに熱心であり、かつ二〇一三年以降、特定秘密保護法、安保法制、共謀罪を次々と制定。さらに現在、災害対策を名目に、明治憲法の緊急勅令にも似た緊急事態条項を提案している。戦前の国民ががらにがらめであった国家主義社会へとバックしていく気配が濃厚ではないか。今回の憲法カフェの学習を通して、明治憲法の思想が新たな装いをもって出現するかもしれないという危機感を抱いた。



特別寄稿

石清水祭に参列して

中居豊二郎



教師生活四十二年、自分の母校大谷高校で教鞭をとっていました。教師というのは世間知らずで、常識が足りない人と人によく言われます。しかし、何か人の役に立ちたいという想いは人一倍ありました。非常勤講師をしていた最後の五年間、行き帰りに見る「大谷川八幡ルネッサンス運動」のカンバンがやたら気になって仕方ありませんでした。

同じ「大谷」という名前が最初から気になっていて、退職後はこのボランティアに参加しようと決め、代表の伊藤さんに連絡をとってやらせてもらうことになりました。

その後、暇で頼みやすいと思われるのか、ボランティアがどんどん増えて、今では九つの団体に所属しています。そのせいか趣味であるハイキングもゴルフもほとんどやれなくなりました。

ハイキングは毎週日曜日に行っていたのですが、それが月一回になり最近ではもう何カ月も行っていません。ゴルフも週二回行っていたこともあったのですが、月に一回になり、今年はもう十月なのに、まだ二回しか行っていません。

そこで、ついこの前、ボランティアもこれ以上は断ろうと決心した矢先のことでした。

民生・児童委員で知り合った赤井さんからの連絡で、石清水八幡宮で絶対八人いる八流旗で欠員が出てどうしても参加して欲しいと言われました。

八幡市に住んで四十五年も経過しているのに、石清水祭という祭がどんなお祭りか、行ったこともなく全然知りませんでした。「八幡を誇れる所に」という想いがあるのに、八幡宮の勅祭を知らないことが恥ずかしく、引き受けることにしました。

三体の神様を一日だけ八幡さんの山頂から下の御社に移し、また山頂へ戻すという一日遷座といいますが、一日神様に下界（人間界）を見てもらうという大事なお祭りだそうです。

前にもふれましたように、最近ハイキングにあまり行ってないので、

登りは自信なく、参加すると決めてから二度下見しました。

当日、最初は下りでしたが、はき慣れないタビ、その上に初めてはくワラヅウリ、本当にてこずりました。何回も何回もゾウリが脱げて民生委員でこの行事に何年も参加されている鹿野さんにそのつど幡（はた）を持ってもらい助けてもらいました。

夜中の二時に集合、三時から二時間かけて下り、その日の夕方六時に集合。七時から二時間ぐらいの登りです。登りは下りよりもつと大変と言われ、赤井さんの奥さんにゾウリをビニールテープでしっかり固定してもらいました。そのおかげで登りは解散後に一回ぬげただけで本当に助かりました。

僕は初めての体験なので大変なのは当たり前ですが、慣れた人もほっとしたのか、帰りのケーブルの中で会話がはずみ、楽しそうに雑談してはる姿が印象的でした。ひと仕事を終えた後の解放感。来年も誘われたらきつと断れないだろうなあと考えながら歩いていました。



豆知識

石清水祭に奉仕する人々

「八流旗神人」のほかどんな役回りがあるのか一部のみ紹介します。

御弓神人（錦袋に納めた御弓を持つ）

御鉾神人（大御鉾）二棟、「中御鉾」三棟、「小御鉾」四棟を持つ）

童子・童女（六名の男児・十名の女児が保護者に伴われてお供する）

御神宝神人（錦袋に包まれた大小の御神宝を持つ）

御唐櫃神人（三座の御神霊の御装束を納めた唐櫃をかつぐ）

御獅子神人（行列の先払いとして御神霊を守護する神役）

駒形神人（身体の前後に白馬の模型を結び付けた四名の男児が勤める）

真榊神人（五色絹をつけた一対の大榊を担ぐ）

御綱曳神人（黄衣姿の神人が、各鳳輦の前後に結びつけられた朱綱を持つ）

駕輿丁神人（鳥兜・褌・袴・藁沓姿の神人各十六名が各鳳輦をかつぐ）

神楽座（行列の最後尾に列なり、絹屋殿前では里神楽を演奏する）

文字でたどる 八幡の歴史

第1回

橋本等安と連歌

土井 三郎

橋本は、名のある社士を輩出した地です。「社士」とは、石清水八幡宮の祭祀である安居会あんぐいを担う武士のことです。

橋本等安とあんは、豊臣秀吉に仕えた社士です。武芸ではなく、お茶や能連歌といった芸事で秀吉に奉仕する御供衆の一人として活躍します。等安は、当好と称したり不伯翁とも号したりしていましたが、ことに連歌に優れていたとことです。それを物語るエピソードがあります。

秀吉が参加する連歌の会で、「おとするは

いつこの駒の轡虫くま」

という句の付け句に一同が困っていた時に、等安が

「霧の中ゆく逢坂おうさかの関」

と付けて、秀吉からお褒めの言葉を賜ったとことです。

一体、なぜ秀吉を感服させたのでしょうか。

連歌は、何人かの者が集まり、「五七五」「七七」と連綿と付けていつてふつうは三十六句で終わり（挙句）となるものです。その中には季節を詠んだものや恋、旅、神仏を取り込み、できるだけバラエティに富んだものに仕上げてゆきます。また、句を付けていく場合、前の句との関連性だけでなく、洒落や機知、古典をふまえた才覚が要求されます。つまり、秀吉が等安の付け句に才覚を認めたことになりました。

どんな才覚なのか、考えてみましょう。

「おとする」は「音する」と捉えるだけでは面白くありません。轡虫ががちがちや鳴いている。それがどうしたということになるからです。「おとする」は「おとずる」＝訪れると解せばどうなるでしょうか。そうすれば、百人一首で知られる蟬丸の次の和歌が思い出されるではありませんか。

「これやこの行くも帰るもわかれては知るも知らぬも逢坂おうさかの関」
要するに、蟬丸のこの古歌をふまえて、前句では、轡虫がかまびすし

く鳴くのを求愛の意味でとらえて、今度いつこの轡虫たちが逢瀬を遂げることができるのであるうか問いながら、もちろんそれはわが身に置き換えてのこととし、深まる秋、霧の中を、男女の逢瀬と別れを知りつくしている逢坂の関を去ってゆくのだと付けた、ということになります。轡虫も霧も秋の季語ですから両方とも秋の句であるとともに恋の句をにじませたものともいえるでしょう。駒や轡から騎乗の武士の姿を思い浮かべてもよいでしょう。

ちなみに、橋本公民館の右脇の路地を進むと古い墓地があり、そこには、橋本、山田、落合など旧社士の墓標を確かめることができます。



●連載するにあたって、八幡を舞台にした文学作品を思い浮かべてみました。

和歌／「古今和歌集」を初めとして勅撰和歌集には、石清水八幡宮や男山を舞台にした多数の和歌が存在します。

今こそあれ我も昔はおとこ山

さかゆく時もありこしものを

― 古今和歌集・読み人しらず

石清水きよき流れの絶えせねば

宿る月さえ限かぎなかりける

― 千載和歌集・能蓮

随筆／誰もが知っている『徒然草』。五

二段は、仁和寺の和尚が石清水にやって来たのに、山上に登らずに帰ってしまってお話です。

軍記物語／『太平記』は、南北朝の動

乱をたどった物語です。ことに、「八幡合戦」は、八幡を舞台にした戦いであるだけに当時の八幡の様子を知る手掛かりとなります。

謡曲／八幡を舞台にした謡曲といえは次の三曲が知られます。「弓八幡」（世阿弥作）、「女郎花」（放生川）

俳諧／松花堂昭乗が八幡の町を詠んだ俳諧には味わい深いものがあります。また、『八幡八景』は俳諧篇と和歌篇漢詩篇が見られます。

狂歌／豊蔵坊信海は、石清水八幡宮の豊蔵坊の社僧でしたが、狂歌に優れた作品を残しました。

近代詩と短歌／吉井勇は戦後の数年間、八幡に寓居していました。そこに生まれた短歌は、勇のそれまででない作風のものでした。